

さいたまゴールド・シアター オーディションルポ

# 新たな表現を求めて

～私たちの人生はまだ終わってはいない～

取材・文 木俣 冬



「俳優の時間で生きてきた人の老い方と、  
生活者の時間で生きてきた人の老い方は違う。  
生活者の老いが、表現の回路にうまく当たらないだろうか、  
それを発掘したい。  
生活者の実感で作った演劇をやってみたいと思ったんです」  
2006年3月14日。蜷川幸雄の新しい挑戦がはじまった。

ズラリと並んだ審査員

## 北海道～九州、さらにはハワイから。 受験者は1,116人！

「今までの演劇の習慣にとらわれない新しい表現を」探す試み—55歳以上の人々で行う演劇集団ゴールド・シアター発足のためのオーディションが、3月14日～3月30日にわたって連日行われた。応募総数1,273人。蜷川幸雄は、書類審査をしないで応募要件を満たす55歳以上の1,116人全員に会うと決断した。予想外に多い応募者だったため、予定していたオーディション日数を大幅に延長、入っていた2本の舞台の稽古スケジュールも変更するという気の入れようだ。「実際に会ってみるとわからない。40年、人と接する仕事をしてきているから、だいたい

は一瞬でつかめる」のだそうだ。  
北海道から九州、さらにはハワイから日帰りで受けに来た人もいた。年齢層も、55歳から80歳までと幅広い。  
はるばる遠くから来た人に「受かったら、どうされるんですか?」と蜷川は心配して聞いた。皆、「引っ越して、こちらにアパートを借ります!」と熱い。「お仕事は?」とも聞く蜷川。皆、「辞めます」「(自営なので)人に任せます」と意欲満々だ。人生100年と考えたとして、折り返しに入った人々の生活をガラリと変えてしまうかもしれない活動だ。向こう一年間、毎日俳優としての稽古を行っていくのだから、今までの生活は捨てなくてはならないが、「旦那に内緒で受けにきました。受かったら、内緒で来ちゃうかもしれない」と笑う主婦もいた。



一緒にウォーミングアップをする蜷川



やったことのない動きに、戸惑いながら、取り組む応募者たち